

宮澤賢治論

—— 恋愛・結婚観の変遷と童話作品への反映（上） ——

表 千 尋

はじめに

宮澤賢治が禁欲主義者として生涯を未婚で貫いたことはよく知られているが、彼が実際に現実の女性へ抱いた思慕や結婚に関する意識の変遷というのは余り周知されていない。賢治は精神主義者としてまるで孤高の聖人のように世間ではとらえられているが、彼は一人の男性として、人間という高尚かつ本能的な生物として、結婚を大いに意識していたのである。

本論は宮澤賢治の生涯に起きた様々なエピソードから彼の「結婚」観がどのように形成され、変遷していったかを検証し考察するものである。

一 賢治の「結婚」観の変遷、賢治の実体験の検証

賢治の童話作品には数はそう多くはないが、あるパターンのヒロインが登場する。「シグナルとシグナレス」のシグナレスや、「土神と狐」の樺の木がそうである。彼女たちヒロインには共通点があ

る。皆一様に健気で純真、つつましやかで、儂げなのである。この女性らしい女性像は、賢治の好みであり賢治の思う「女性」というものの理想の姿でもあった。孤独の修羅の道を選び、女性を遠ざけまた彼女らに対して遠慮や苦手意識を持ちながら、賢治は「女性」性に憧れを抱き続けていた。このヒロイン像のルーツはどこにあったのだろうか。

・この多感な旅人は旅の間に沢山の恋を致しました、女をも男をも、あるときは木を恋したり、何としたわけ合やら指導標の処へ行つて恭しく帽子を取つたり、けれども、とうとう旅の終りが近づきました。

これは盛岡高等農林学校時代に作った同人雑誌『アザリア』第一号（大正六年（一九一七年））に載せた「旅人のはなし」から」という散文作品の部分である。賢治自身を思わせる「旅人」が旅の経験譚を述べていく。独身主義者として知られる賢治だが、実際は彼のまわりには何人か、周囲から結婚を勧められるなどして関係を

取りざたされた女性がいたことが分かっている。彼は禁欲主義者で理性の人たろうとしたが、その実惚れっぽく、「女性」に夢見る青年としての一面も持っていた。二節以降はしばし、賢治の女性観・恋愛観・結婚観の変遷と独身主義の成立要因を、賢治の実生活から探して時系列にそって整理してみることとする。

二 初恋の特別視、非成就

賢治が初めて恋をしたのは十八歳の春だったという。大正五年（一九一六）三月に盛岡中学校を卒業した後、賢治は岩手病院で肥厚性鼻炎の手術を行ったが、術後の経過があまり良くなく高熱が続いた。この入院中に賢治は片思いの初恋をした。相手は岩手病院の看護婦だったという。

リビドー・肉的な衝動から湧き起こった初めての恋、文字通り熱を上げるような恋が自分の体温を上げるのを賢治は感じた。この恋は賢治の一度な片思いであったが、「この人と結婚したい」と退院してきた賢治は父母に話したという。そのとき父は「まだお互いに若すぎる」と許可しなかった。シグナルとシグナレスの結婚を阻んだのも、やはりお目付け役の電信柱というシグナルの男性の眷族の反対である。自由結婚という言葉に人々は憧れはしたものの、家同士の結婚が当然だった時代のことである。賢治は家長制度に反発の念を持ちながらも、父に対する畏敬の意は捨てられずにいた。次は文語詩「公子」の下書稿一の部分である。

父母のゆるさぬもゆる

きみわれと 年も同じく

ともに尚 はたちにみたず

われはなほ なすこと多く

きみが辺は 八雲のかなた

わが父は わが病ごと

二たびの いたつきを得ぬ

火のごとくきみをおもへど

わが父にそむきかねたり

白衣の看護婦への恋情は結局相手に告げられなかったが、本能的でロマンチックなこの初恋の非成就は特別な経験として賢治の心に留められた。後に自分の人生を振り返りながら詩編のためにまとめたノートにもその様子が見てとれる。「東京」ノートには「岩手病院熱 芝赤十字ノ看護婦」の語が、「文語詩篇」ノートにはドイツ語で初恋を示す「Erste Liebe 移り行く心」というメモ書きが残されている。その後もたびたび賢治は初恋の思いを詩などに残し、推敲を重ねた。

森の上のこの神楽殿 いそがしくのぼりて立てば

かくこうはめぐりてどよみ 松の風頬を吹くなり

(略)

さらにまた夏雲の下、 青々と山なみははせ、

従ひて野は澁めども かのまちはつひに見えざり

うらゝかに野を過ぎり行く かの雲の影ともなりて

きみがべにありなんものを　うちどよみまた鳥啼けば

いよいよに君ぞ恋しき　野はさらに雲の影して

松の風日に鳴るものを

これは詩「丘」の部分である。初恋の思いを連ねた多くの短歌や詩作品に共通するのは「高台(神楽殿)にのぼって北の空へ流れて行く夏の雲を見つめる」と言う情景である。賢治は初恋の人の出身地だったともされる北の方角に流れる雲に初恋の思い出を重ねていたようだ。この初恋の情景が、のちに「女性」への憧憬やセクシュアルな「艶かしき雲」のイメージへとつながる原点となっている。

また同時期に、島地大等訳の「漢和对照妙法蓮華経」を読んだ賢治は体が震えるほどの感銘を受け、法華経思想に深く傾倒していく。恋の非成就——第六節で後述する「魂の同行者」の希求と非成就も含めて、個人的な愛の挫折の経験はやがて我欲の否定や法華経の思想と混じり合い、自己犠牲的ともいえる博愛精神、「みんなのまことの幸福」を願う心へと昇華する原点でもあったことをここで先に述べておく。

三 結核の発病、肉体の悩みと絶望

初恋も経験し、人並に女性に対して悩ましげな思いも抱いていた賢治青年であるが、そもそも彼は何故結局結婚しなかったのだろうか。女性に憧れながら、賢治は女性を苦手とした。ときに大げさに「女性」を自分の周りから排除しようとさえした。賢治は宮澤家の長子であり、本来ならば結婚して子供を設け家督を継ぐべきであつ

たのに、何故彼はその生涯を未婚で通したのだろうか。

賢治の「結婚」を阻んだのは何だったのか。家制度による一族への束縛と個人の自由恋愛の反対か、それまで知識階級では常識とされていた所帯や女性関係を持つことは理性的な活動の妨げになるという固定観念だろうか。だがとくに大きな要因として挙げられるのは、やはり賢治自身の結核の発病と自覚であろう。

賢治の結核が発覚したのは大正七年(一九一八年)、六月三十日のことであつた。賢治は胸の痛みから岩手病院で検査を受けた。医師には肋膜炎と診断された。肋膜炎とは現在で言う胸膜炎のこと、肺の外部を覆う胸膜に炎症が起こる疾患である。胸膜炎はそれ自体で発症することは少なく、ほとんどはがん・結核・肺炎などの後に発症することが多い病である。賢治の肋膜炎の端となったものこそ結核の発病だったのである。

結核は昭和二十五年に治療法が確立されるまで、日本人の死亡原因の第一位を占めた病である。初期症状は風邪に似ているが、咳や痰、発熱が長く続き、悪化すると血の混じった痰などが出はじめ呼吸困難に陥り、やがて死を迎える。当時は不治の病であり、若くして命を落とす人が少なくなかった。明治時代には樋口一葉や正岡子規といった名だたる文学者や芸術家が結核のために夭逝したため、創造的精神と肺病に相関関係があるという考え方——芸術で名を残す人は結核で死ぬという結核のロマン化、結核をテーマにした結核文学の潮流も生まれた。結核患者は熱のため頬が赤くなり、目はうるみ、痩せて肌は白くなるため美しいというイメージにも結び付けられ、薄倅の才子佳人に特有の病氣として悲劇的に描かれることが

多かつたのである。

しかし現実の結核は肺を病み苦しみながら死に至る恐ろしい病である。病院で診断を受けたころ賢治は『アザリア』の同人である河本義行に「自分の命もあと十五年はあるまい」と述べたとされる。結核の発病は賢治の意識を否が応にも死へと向けさせた。自分の生命の存在価値と意義を賢治は見つけ直さねばならなくなったのである。

家族の証言によると、診断を受けた直後の夏ごろから賢治は「双子の星」や「蜘蛛となめくちと狸」といった童話の創作を始めたという。同年七月に鈴木三重吉主催の童話雑誌『赤い鳥』が創刊されたことも影響を及ぼしているだろう。大正九年十月ごろには国柱会に入会し、上京。その後国柱会理事の高知尾智耀のすすめもあって賢治は法華経紹介のための童話制作に熱中した。大正十年八月妹トシの病の報で帰花した際、賢治のトランクは書きためられた童話の原稿でいっぱいだったという。弟の正六によれば、賢治は「童児わらしこさえる代りに書いた」と言いながら、書いた童話を家族に読み聞かせたという。価値の失われた肉体の牢獄のなかで、賢治の意識はより精神的なものの延長に自らの存在意義を見つけようとしたのである。賢治は童話制作に励むことで自己の存在価値を見出そうとした。賢治にとって学校の先輩でもあり、詩人として敬愛した石川啄木もかつて明治四十五年（一九一二年）に結核のために命を落としている。賢治もおのれの創作を我が子として世に残さんと、この頃各所に原稿を持ち込み熱心に文学活動を行った。

このとき賢治は二十五歳、結婚適齢期を迎えているのに腰も落ち着けず、家業を手伝うわけでもなく、創作に耽るばかりの賢治を、家族はいかに落ち着けるか頭を悩ませていた。十八歳の頃、お互いに若いからという理由でかなわなかった結婚を、今度は周囲の方から勧めてくるようになったのであろう。しかし賢治は結婚しようとはしなかった。賢治は童話を「童児（わらしこ）さえる代りに」書いたと家族に言った。結核が発病してから賢治はすっかり自分が結婚することを諦めてしまっていたのだ。

結核は発病者の咳などから飛沫感染する病である。遺伝によつて感染するのではないことは当時すでに科学的に明らかにはされていたが、大衆のうちでは結核はまだ遺伝病と同じ扱いをされていた。結核を発症しやすい体質、遺伝子というものは存在するとまことしやかに言われていたのである。そして、宮澤一族の家系がそれだった。宮澤家は花巻では優秀で有力な一族（マキ）——宮澤マキとして畏敬の念を集められながら、同時に肺病（はい）マキとして差別の対象でもあったのだという。宮澤家では賢治の妹トシをはじめ、母イチ、叔母コト、母方の叔父磯吉や母方の祖父金次郎も結核を患っていたことが分かっている。

賢治が最初に結婚しないことを宣言したのは、大正七年二月二日の政次郎宛書簡で、こので肋膜炎と診断される前であるが、自分が肺病マキの者であるという自覚と、胸の痛みや下がない熱といったこれまでの症状から、賢治はおのれの身体に欠陥があるのではと薄々理解していたのかもしれない。

では賢治の結婚を阻んだのは「結核患者・結核体質の者への差別意識」であつたかという、それは違ふ。賢治がおのれの結婚を忌避したのは、科学者としての見解から——優生学の見地に基づいてのことであつた。賢治はハヴロック・エリスの『性の心理』を愛読しており、エルンスト・ヘッケルの『生命の不可思議』や丘浅次郎の『進化論講話』も読んだらうと推測されている。^六 優生学の積極的推進者であるエリスの『性の心理』中で、優生学について述べた「産児の科学 (The Science of Procreation)」の章にはこんな文章がある。

結核患者の系統を引いた夫婦の間に於ても、万全の策を講じて子供を生まないで済ますやうにしなければならぬといふ事は、これまた幾多の学者から主張されてゐるところである。(例へば一九〇〇年にネーブルスで開催された結核病会議の席上で、マッサロンゴが結婚と結核との關係を論じてその必要を力調してゐる。)^七

生物学・優生学的に見て劣る遺伝子は淘汰されるべきであつた。進化論を信奉していた賢治自身がおのれの身体には欠陥があると判断してしまつたのであらう。全体の繁栄を考えるなら結核を発症しやすいおのれの遺伝子は残すべきでない。結核を発病した自分は生物として落伍している——賢治青年はさぞや悩み、絶望したことだらう。自分は人並みの恋をしてはいけない、結婚すべきでないといふ忌避と諦めはこうして形成されたと考えられる。

四 性愛を自然への同化希求に変えて

禁欲主義者となつた賢治は、『春と修羅』の序で「わたくしはどこまでも孤独を愛し、熱く湿つた感情を嫌ひますので」と書いている。周囲の者が持ちかけて来る縁談をことごとく断り、羅須地人協会時代に賢治を慕つて接近した高瀬露を避けたという逸話も有名であらう。女性にたいする忌避(あるいは無視)は、初期作品「女」や詩「聖女のさましてちかづけるもの」、童話「土神と狐」におけるヒロインであるはずの権の木を無視したストーリーの展開に跡づけられる。また「土神と狐」のテーマは恋愛をめぐる嫉妬心であり、その成立には禁欲主義の考え方が根底にあると思われる。賢治は「女性」を精神修養の道を阻む者であり、欲を誘発する存在として嫌悪すべき生々しき「女」として考えていた。

肉体的な伴侶を娶ることを否とした賢治の性愛はその矛先を「女性」から自然へと変えた。賢治は「おれは、(欲が治まらなくなつて)たまらなくなると野原へ飛び出すよ。雲にだつて女性はいるよ。(略)風だつて、甘いことばをささやいてくれるよ」と友人藤原嘉藤治に話した^八といふ。森佐一も、賢治は性欲に襲われた時「手帳とペンシルを持って、夜でも暁でも、たちまち気圏の底に、ぼとしぎ(よだか)のように飛び出した」^九のだと語っている。

結核の発病から結婚する事を諦め、精神的な連れ添い(第六節で後述する「魂の同行者」)も得ることの叶わなかつた賢治は、自然を自らの恋人としようとした。詩「一本木野」でも「わたくしは森やのほらのこひびと」と称している。

次は賢治が病床で作つたといふ詩「風がおもてで呼んでゐる」の

部分である。「疾中」詩篇群（羅須地人協会時代の終わりごろ、一九二八—一九三〇に成立）の一片であり、病床で弱気になり恐怖に追いつめられた賢治が、己の病や死を敵しき自然の一部であると感じ、死によって自然と一体化する自分を「結婚」の言葉で表現している。

風が交々叫んでゐる

「おれたちはみな

おまへの出るのを迎へるために

おまへのすぎなみぞれの粒を

横ぞつぼうに飛ばしてゐる

おまへも早く飛びだして来て

あすこの稜ある巖の上

葉のない黒い林のなかで

うつくしいソプラノをもつた

おれたちのなかのひとりと

約束通り結婚しろ」と

繰り返し繰り返し

風がおもてで叫んでゐる

五 反動としての仲人賢治

自身の結婚には諦念を感じ未婚を貫いた賢治は、その一方で埋め合わせのように友人の結婚の世話には熱心だったという。賢治自身は家にとらわれぬ純粋な自由恋愛・結婚に賛成していた。友人藤原嘉藤治の話によると、レストランで何気なく出会った女給が自分の

好みだと呟いた藤原嘉藤治に対し、「好きなら結婚しろ、ここでハッキリ返事しろ」と賢治は言つたという。一〇実昭和三年三月、賢治は嘉藤治のためにわざわざ青森まで出向いて花嫁（女給の女性）の親の許しを得に行き、婚礼の準備を整えるなど仲人の役割を懸命に果たした。賢治はその後生まれた嘉藤治の長女と長男に名前まで贈つている。

童話作品「シグナルとシグナレス」にも二人の結婚を取りまとめやろうとする倉庫の屋根というキャラクターが登場する。彼はシグナルとシグナレスの結婚に唯一賛成してくれる者であった。倉庫の屋根の立ち位置はそのまま賢治の自由結婚に対するスタンスを表しているだろう。

六 「魂の同行者の希求」と非成就

なんだこの眼は 何十年も見た眼だぞ

昨日も今日も問ひ答へしたあの眼だぞ

向ふもぢつと見てゐるぞ

清楚なたましひたゞそのもの

先に挙げたのは詩「ある恋」である。人並みに妻として女性を娶ることを避けた賢治は、その代償を求めるように、胸の虚を埋め寄り添ってくれる道連れ、「魂の同行者」を希求した。「魂の同行者」とは具体的に言えば、肉体のしがらみや性欲の範疇の外にある、精神的な恋人であり、宗教の道を同じくする者である。その大きな候補に挙げたのは、妹のトシと一つ級下の親友であった保阪嘉内で

ある。

二歳年下のトシは賢治のすぐ下の妹である。賢治にとつて、自分の宗教の理解を得られなかつた宮澤の家族のなかで唯一の理解者であつた。勉強のためトシが上京し、離れて暮らした間も兄妹は書簡を多くやりとりした。トシは賢治の思想を理解し、トシ自身が病臥し静養中だったときも賢治の作品整理に協力した。賢治にとつては分身ともいえるかけがえのない人物である。

トシ本人は、卒業間近で病がちとなつてしまつたが、東京の日本女子大に主席入学したほどの才女で、性格は物静かでしとやかな女性だったという。賢治が理想としたヒロイン——女性の姿のモデルが、妹トシであつたことは間違いないだろう。

保阪嘉内に賢治が出会つたのは盛岡高等農林学校時代のことである。大正五年（一九一六年）、嘉内は賢治の一つ下級生として盛岡高等農林学校に入学し、その時の寮の室長を勤めていたのが賢治だった。嘉内は演劇・文学趣味をもち、石川啄木とトルストイに傾倒していた。奔放な立ち居振る舞いと、深い演劇の知識などに賢治が惹かれ、二人は無二の親友となり盛んに談議を交わすようになった。賢治と同級の小菅健吉、嘉内と同級の河本義行と大正六年（一九一七年）七月に創刊した文芸同人誌『アザリア』でもお互いを意識し呼びあうような作品を書いている。

また『アザリア』完成ののち二人で岩手山を登山したときに、「みんなの幸福を実現させる」銀河の誓いを交わした相手である嘉内は『銀河鉄道の夜』のカムパネルラのモデルの一人とも言われている。

大正七年（一九一八年）三月、嘉内は高等農林学校を除名処分となり山梨へと帰郷したが、その後も二人は親密な手紙のやり取りを続けた。

賢治と嘉内はお互いを精神的な恋人と認めあつていた。「文語詩篇」ノートの農林第二年 第一期の項のメモには「Zweite Liebe 果樹園」の語が見られるが、これは賢治が嘉内との邂逅を「魂の同行者」にならう者との出会いとして見ていたからではないだろうか。以降は『アザリア』第四号（大正六年（一九一七年）十二月十六日）に掲載された嘉内の小説「打てば響く」の部分である。

友よ、まことの恋人よ倚り来よ。

われと思ふさま泣かうではないか、地が固く氷つて身を切る様な風の吹き荒ぶ夜なら、北海のはなれ島、月下に二人よりそひて泣かう、心ゆくまでに泣かう。

（略）友よ、梅川忠兵衛のうるはしい物語を御存じだらう。小春治兵衛のはなしも知つてだらう。ロメオとジュリエット。天文学者レオ、ニコラツキツチと星との話を知つて御いでだらう。空と土との恋物語、また旅人と里程標、ある若者と材木との恋物語」。

（略）人はいかに多く集るとも鳥合の衆では何にもならない。それ故にある集りに集るとき人々ならばすべてが全じ方向に向かつて全じ考へで、ほんとうに、まじめで、御俐口者でなく、共に共に進んで行たいものだ。あゝしかし誰がほんとうに私の心を汲んでくれるだらうか。あゝ恋人よ、おんみより他に我を知る人はない。

次は賢治のちに自分の学生時代を思い出しながら書いた詩〔古びた水いろの薄明穹のなかに〕(昭和二年(一九二七年)五月七日)である。

古びた水いろの薄明穹のなかに

わたくしは遠い停車場のれつつのあかりをのぞみ

それが一つの巨きな建物のやうに見えますことから

その建物の舎監にならうと云いました

そしてまもなくこの学校がたち

わたくしはそのがらんとした巨きな寄宿舎の

舎監に任命されました

恋人が雪の夜何べんも

黒いマントをかついで男のふうをして

わたくしをたづねてまゐりました

そしてもう何もかもすぎてしまったのです

大正六年(一九一七年)十二月二十三日、賢治と嘉内は雪の中を「七つ森」方面へ出かけたことがある。その時のことが嘉内の歌稿『文象花崗岩』に記録されており、その中には「夕闇のデンシンバシラ へだたりて ひろ野の雪と二人の若者」という歌がある。賢治童話には様々な場面で電信柱が登場する。「銀河鉄道の夜」の最後のシーンや、「月夜のでんしんばしら」の行軍、あるいは「シグナルとシグナレス」では盛んに電信をやり取りしている。精神を共有する電信柱のイメージはこの時生まれたものである可能性が高い。

近親であることや同性であることのくびきに捕らわれぬ精神上的の恋人、トシと嘉内の存在は賢治の孤独を埋めてくれるはずであった。しかし賢治はそんな二人とも悲痛な別れをせねばならなくなった。

先に賢治のもとを離れて行ったのは保阪嘉内だった。大正九年(一九二〇年)に賢治が国柱会に入会した後、書簡をやり取りする中で賢治は嘉内にも執拗に法華経への入信・帰衣をすすめて経典を贈るなどした。しかし嘉内は入信しなかった。とうとう大正一〇年(一九二一年)七月信仰上の問題で二人は決別することとなった。

嘉内との離別に悲しむ賢治の耳にトシの嗜血の報が届いたのはそのすぐあと、同年の八月であった。知らせを受けて賢治は帰花。懸命に看護にあたるも大正十一年(一九二二年)十一月二十七日の夜、結核のためにトシは没する。みぞれ降る寒い日のことであった。トシの死に衝撃を受けた賢治は「永訣の朝」の三部作を書き、そして「永訣の朝」以降半年詩作などを止んだ。トシの存在とそれを喪った悲しみは賢治文学全般に強く影響を残した。トシの死により、賢治は自分は地上に残された「修羅」、トシを失われた聖なる分身として見るようになり、やがて聖性の希求は個別希求(恋愛)から普遍的倫理性(宗教情操)へと変換した。

次は詩「無声慟哭」の部分である。

わたくしが青ぐらい修羅をあるいてあるとき

おまへはじぶんにさだめられたみちを

ひとりさびしく往かうとするか

信仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくしが

あかるくつめたい精進のみちからかなしくつかれてゐて
毒草や蛍光菌のくらい野原をただよふとき
おまへはひとりどこへ行かうとするのだ

「魂の同行者」の希求の非成就は、賢治をさらなる孤独の奈落へと突き落した。個人的な恋愛(肉体的な恋愛、そして精神的な恋愛)の挫折は賢治の意識を大きく転換させた。個に愛を求めるのではなく全体を愛す——賢治は「みんなのまことの幸福」を願う宗教的な愛の求道者となつたのである。

七 自己無化志向

結核という死病により己は遺伝子を残すに不適合であるという肉体の悩みを抱え、賢治は自身の存在意義と価値を再考し、童話制作にそれを求めた。しかし賢治の文学活動はその熱心さもあえなく、世間に認められず上手いかなかった。肉体の悩みのために生じた孤独を埋めようと探した魂の同行者も得ること叶わず、さらに深い孤独と懊悩を抱え賢治は一人きりで修羅の道を歩んだ。賢治が求めるものはみな賢治の手をすり抜けこぼれ落ちてしまったのである。誰にも必要とされぬ無価値な自分はいつそ無であればよかったという賢治の悲嘆は自己無化志向として多くの作品の底流となつた。

詩集「春と修羅」に収められた「小岩井農場」の「パート一」「パート四」「パート九」を整理してみる。大正十三年(一九二四年)に出版された当時の初版本と、賢治が手元に置き後に手入れた宮澤家

本を比較すると後者では一部が削られていることがわかる。

宮澤家本では、みんなの輪の中から「わたくし」が消失し、魂の同行者の希求のテーマさえ削られている。「みんな」から欲待される「わたくし」は居らず、「みんな」の幸福には「わたくし」は数えられていない。後ろを振り返っても「わたくし」の道連れとなつてくれる者もない。孤独はより強調され、賢治の抱える悲しみは自己無化志向として作品に反映されるようになったのである。

八 賢治の女性観・恋愛観・結婚観の変遷のまとめ

次は「業のはなびら」詩群(大正十三年(一九二四年)十月頃)の草稿「産業組合青年会」(第二葉)である。賢治の悲しい「恋」の変遷が表現されている。ここに出てくる「恋」は初恋の淡い感傷であり、「魂の同行者」の希求であり、宗教情操の求道である。それらが挫折して虚無に襲われる賢治の悲痛を、読む者に感じさせずにはいられない詩である。

びしゃびしゃの寒い雨にぬれ

かすかな雲の蛍光をたよりながら

こんやわたくしが恋してあるいてあるものは

いつともしらぬすものころの

なにか明るい風象である

まことにわたくしはこのまよなかの

杉やいちみに囲まれて

ほのかに睡るいちいちの棟を

つぎからつぎと数へながら
どこからともわかない稲のかほりに漂ひ
つかれたこほろぎの声や水の眩き
またじぶんとひとともわかず
水たまりや泥をわたる蹠音を
遠くのそらに聞きながし
から松が風を冴え冴えとし
銀どろが雲を乱してひるがえるなかに
赤い鬼げしの花を燃し
黒いすももの実をもぎる
頬うつくしいひとびとの
なにか無心に語つてゐる
明るいことばのきれぎれを
狂気のやうに恋ひながら
このまつ黒な松の並木を
はてなくひとりたどつて来た
あゝわたくしの恋するものは
わたくしみづからつくりださねばならぬかと
わたくしが東のそらに
声高く叫んで問へば
そこらの黒い林から
嘲るやうなうつろな声が
ひとときの木だまをかへし
じぶんの恋をなげうつものは
やがては恋を恋すると

さびしくひとり呟いて
来た方をふりかへれば
並木の松の残像が
ほのじろく空にひかつた

賢治の女性観・恋愛観・結婚観がどのように変遷してきたかをこれまでに見証してきた。そのまとめを次に整理しておく。

- 童話作品に共通する「儂げなヒロイン像」のルーツは特別視された初恋の非成就の経験と妹トシの姿にあつた。
 - 自身の結核の発病から、肉体的なものから精神的なものへと大きく結婚観・恋愛観が変化した。
 - 個人的な恋愛の挫折から、個への愛でなく「みんなのほんとうの幸福」を願う全体愛の思想へと転換し、さらに賢治自身は自然との同化希求を持つに至つた。
 - 独身主義・禁欲主義の中で女性観が、想の「儂げなヒロイン像」と避けるべき「生々しき女」に二極化した。
- 宮澤賢治論 恋愛・結婚観の変遷と童話作品への反映(下)ではこれらのことを踏まえたいうで、童話「シグナルとシグナレス」を読み解くこととする。

「春と修羅」(初版本)	「春と修羅」(宮澤家本)
<p>小岩井農場 パート一</p> <p>あすこなら空気もひどく明瞭で 樹でも艸でもみんな幻燈だ もちろんおきなぐさも咲いてゐるし <u>野はらは黒ぶだう酒しゆのコツプもならべて</u> <u>わたくしを歓待するだらう</u></p> <p>(略)</p> <p>ひらつとわたくしを通り越す みちはまつ黒の腐植土で 雨あまあがりだし弾力もある 馬はピンと耳を立て その端はじは向ふの青い光に尖り いかにもきさくに馳けて行く <u>うしろからはもうたれも来ないのか</u></p> <p>(略)</p> <p>汽車からおりたひとたちは さっきたくさんあつたのだが みんな丘かげの茶褐部落や 繋つなぎあたりへ往くらしい 西にまがつて見えなくなった</p>	<p>小岩井農場 パート一</p> <p>あすこは空気も明瞭で 樹でも艸でも幻燈だ おきなぐさも咲いてゐやうし きみかげさうもぎっしりだ</p> <p>(略)</p> <p>ひらつと横を歩き過ぎる みちはまつ黒の腐植土で 雨あまあがりだし弾力もある 馬はピンと耳を立て その端はじは向ふの青い光に尖り いかにもきさくに馳けて行く</p>
<p>小岩井農場 パート四</p> <p>いまこそおれはさびしくない たつたひとりで生きて行く <u>こななきままたましひと</u> <u>たれがいつしよに行けやうか</u></p> <p>大びらにまつすぐに進んで それでいけないといふのなら 田舎ふうのダブルカラなど引き裂いてしまへ</p>	<p>小岩井農場 パート四</p> <p>いまこそおれはさびしくない たつたひとりで生きて行く</p> <p>大びらにまつすぐに進んで それでいけないといふのなら 田舎ふうのダブルカラなど引き裂いてしまへ</p>
<p>小岩井農場 パート九</p> <p>いま疲れてかたちを更へたおまへの信仰から 発散して酸えたひかりの澱だ <u>ちいさな自分を割ることのできない</u> <u>この不可思議な大きな心象宇宙のなかで</u> <u>もしも正しいねがひに燃えて</u> <u>じぶんとひとと万象といつしよに</u> 至上福しにいたらうとする それをある宗教情操とするならば</p>	<p>小岩井農場 パート九</p> <p>いま疲れてかたちを更へたおまへの信仰から 発散して酸えたひかりの澱だ</p> <p>まことの福しにいたらうとする それを一つの宗教風の情操であるとするならば</p>

そのねがひから砕けまたは疲れ
じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと
完全そして永久にどこまでもいつしよに行かう
とする
この変態を恋愛といふ

(略)

もうけつしてさびしくはない
なんべんさびしくないと云つたところで
またさびしくなるのはきまつてゐる
けれどもここはこれでいいのだ
すべてさびしさと悲傷とを焚いて
ひとは透明な〔軌〕道をすすむ
ラリツクス ラリツクス いよいよ青く
雲はますます縮れてひかり
わたくしはかつきりみちをまがる

そのねがひから砕けまたは疲れ
じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと
完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうと
する
この変態を恋愛といふ

(略)

もうけつしてさびしくはない
なんべんさびしくないと云つたところで
またさびしくなるのはきまつてゐる
けれどもここはこれでいいのだ
すべてさびしさとを焚いて
ひとは透明な〔軌〕道をすすむ
ラリツクス ラリツクス いよいよ青く
雲はますます縮れてひかり
かつきりみちは東へまがる

参考文献・資料一覧

- 『(新)校本 宮澤賢治全集』(筑摩書房、一九七九)
- 原子朗・編『宮澤賢治語彙辞典』(東京書房、一九八九、一〇〇)
- 山内修・編『年表作家読本 宮沢賢治』(河出書房、一九八九・九)
- 上田 哲ほか『図説宮沢賢治』(河出書房新社、一九九六・三)
- 森荘巳池『宮沢賢治の肖像』(津軽書房、一九七四・十)
- 宮沢清六『兄のトランク』(筑摩書房、一九八七・九)
- 佐藤隆房『宮沢賢治』(富山房、一九七五・四)
- 『文藝別冊 宮沢賢治 修羅と救済』(河出書房、二〇一三・九)
- 『宮沢賢治 第十六号』(洋々社、二〇〇一・六)
- 渡部芳紀『国文学 解釈と鑑賞』別冊 宮沢賢治 名作の旅』(至文堂、一九九二・四)
- 国文学編集部・編『宮沢賢治の全童話を読む』(学灯社、二〇〇三・五)
- 『春と修羅』第二集 研究』(宮沢賢治学会イーハトーブセンター、思潮社、一九九八・三)
- 大塚常樹『宮沢賢治 心象の宇宙論(コスモロジー)』(朝文社、一九九三・七)
- 関口安義『港の人 児童文化研究叢書〇〇三 賢治童話を読む』(港の人、二〇〇八・一二)
- 松田司郎・笹川弘三『宮澤賢治 花の図誌』(平凡社、一九九一・五)
- 松田 司郎『宮澤賢治 イーハトーヴ図誌』(平凡社、一九九六・六)
- 加藤篤『童話「月夜のでんしんばしら」の工学的考察』(『北九州工業高等専門学校研究報告』四四、北九州工業高等専門学校、二〇一

一)

- 遠藤 祐「ニシグナルとシグナレス(その二)——信号機たちの物語」(『キリスト教文学研究』(二〇)、二〇〇三)
- 遠藤 祐「ニシグナルとシグナレス」その二・夜と、そして昼の物語」(『學苑』七五一、昭和女子大学、二〇〇三)
- 牧野立雄「恋愛と音楽：「シグナルとシグナレス」覚書 特集「宮沢賢治童話の再検討：生誕百年記念」：(作品の再検討)」(『国文学』七一(九)、至文堂、二〇〇六)
- 萬田務「ニシグナルとシグナレス」考…宮沢賢治作品ノート(一)(たて組)」(『大阪城南女子短期大学研究紀要』一〇、大阪城南女子短期大学、一九七五)
- 信時 哲郎「結核患者・宮沢賢治」(『上智大学国文学論集』三六、二〇〇三・一)
- 池川 敬司「宮沢賢治の初恋と短歌…不可解な歌をめぐる」(『国文学』九二、二〇〇七・三)
- 中野 新治「宮沢賢治における恋愛と宗教…「丁丁丁丁」をめぐる」(『日本文学研究』二四、一九八八・十一)

一 「道づれの旅人との別れ」無窮遠のあなたに離れたる友達は誠の兄弟だった」という表現には後の賢治の作品の大きなテーマの片鱗がうかがえ、またその後の彼の半生——妹トシや親友保阪嘉内との離別、魂の同行者の切なる希求を暗示するような内容が見られる。

二 発疹チフスと診断されるが、結核の初期症状の可能性がある。
三 相手は岩手病院の看護婦、高橋ミネ説があるが未詳。

四 賢治の看病にあたつた賢治の父政次郎は二度も倒れた。そのため賢治は負い目を感じ、父の言うことに反対しにくかつたという。

五 当時は死病である結核と直接診断する事ははばかれたため、結核であっても肺浸潤や肋膜炎などぼかした表現で患者に伝えられることが多かつた。

六 信時 哲郎「宮沢賢治とハヴロック・エリス…性教育・性的周期律・性的抑制・優生学」(「神戸山手大学環境文化研究所紀要 六」二〇〇二・三)

七 増田訳「産児の科学」による。

八 森荘巳池『宮沢賢治の肖像』(津軽書房、一九七四・十)

九 注一一に同じ。

一〇 注一一に同じ。

一一 賢治の『旅人のはなし』から」に呼応する部分。